

## 4. デイケアにおける就労支援のアプローチ ～密接な関わりが主観的幸福感に及ぼす効果～

川口クリニック デイケア 田邊 尚彦 田尻 朋子 柴垣 貴子  
横山 弘美 柴田 勲

### ■はじめに

現在デイケアで取り組んでいる就労準備コースでは、様々なプログラムを行い、就労に必要な準備をしている。プログラム内容は、SST、SCIT(社会認知ならびに人間関係のトレーニング)、グループワーク、グループディスカッション、履歴書、マナー研修、知識習得、作文、ハートフル川口出張プログラム、ハートフル川口作業体験プログラムを行っており、就労に必要な個人能力の習得、また身体的、精神的、社会的な準備を行っている。

### ■研究目的

本研究は、デイケアにおける就労準備コース参加メンバー個々の変化を測定し、今後のさらなる支援の充実を図ることを目的とする。

### ■研究方法

研究対象：就労準備コース参加メンバー（6名）

研究期間：4月(参加当初)から9月(6ヶ月後)まで ※就労準備コース 1クール6ヶ月間

比較：就労準備コース参加当初、6ヶ月後

実施：心理検査3種類(①LASMI、②Well-being評価尺度、③BSCP)を就労準備コース参加当初、6ヶ月後に施行し、参加期間内の変化を測定した。更に、就労準備コース参加メンバー6名に就労準備コース内で行ったプログラムについて一番身になったプログラムについて聞き取り調査を行った。

①LASMI(精神障害者社会生活評価尺度)・・・精神障害のある人の生活障害を包括的に捉え

る目的。担当スタッフによる聞き取りを主とした客観的な評価。生活障害(日常生活、対人関係等)が重くなると尺度得点が高くなる。5つのサブスケール毎に平均点を算定。

②Well-being評価尺度(主観的幸福感を測定する尺度)・・・観察者からはとらえにくい、患者自身の認知、情緒、思考、意欲、自発性などの体験を測定する目的。1点から6点までを範囲とし、主観的幸福感が高いと得点が高くなる。

③BSCP(勤労者のためのコーピング特性簡易尺度)・・・ストレス対処傾向を把握する目的。1点から6点までを範囲とし、ストレス対処能力が高いと得点が高くなる。

### ■研究結果

施行検査(3種類)について、それぞれ参加当初、6ヶ月後で比較した結果、Well-being評価尺度について、有意な向上がみられた(図1)。LASMI(図2)、BSCP(図3)については、参加当初、6ヶ月後において有意な差はみられなかった。

図1：Well-being 評価尺度  
メンバー6名の平均得点

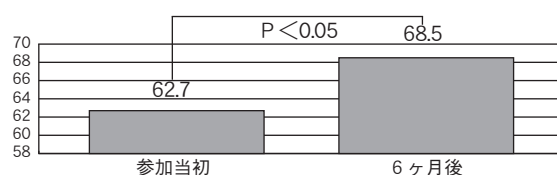
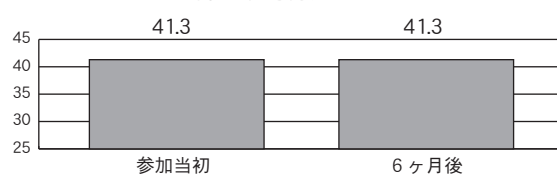
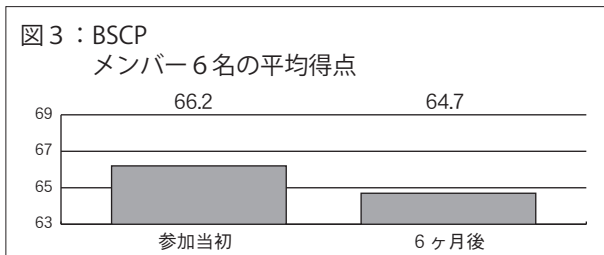
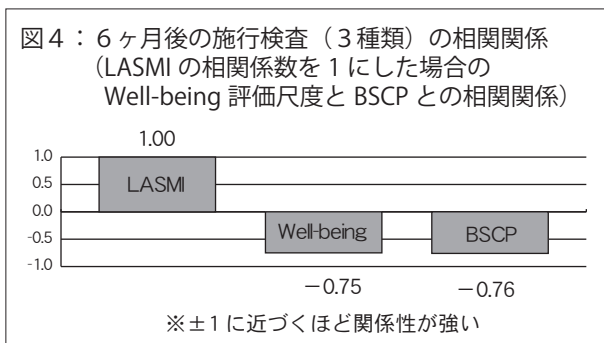


図2：LASMI  
メンバー6名の平均得点

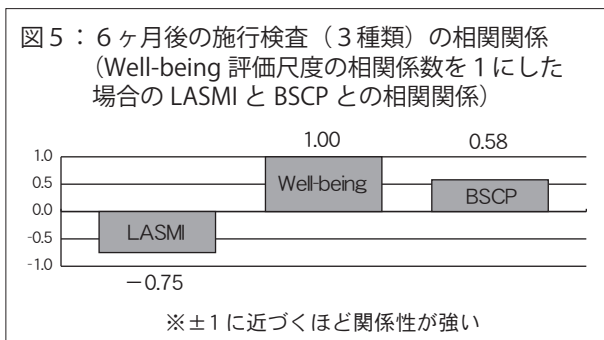




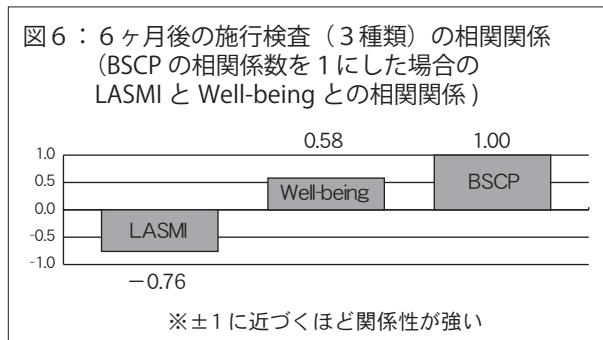
また6ヶ月後の施行検査（3種類）の相関関係を比較し、相関係数を元に図示した。LASMIとWell-being評価尺度、BSCP間に負の相関が見られた。つまりLASMIの得点が高い場合(生活障害の程度が重い場合)には、Well-being評価尺度得点が高い(主観的幸福感が低い)、BSCP得点が高い(ストレス対処能力が低い)という結果になった(図4)。



Well-being評価尺度とBSCP間に正の相関がみられ、LASMIとの間に負の相関がみられた。つまりWell-being評価尺度得点が高い場合(主観的幸福感が高い場合)には、BSCP得点が高く(ストレス対処能力が高い)、またLASMIの得点は低くなる(生活障害の程度が軽くなる)という結果になった(図5)。またその逆であるBSCP得点が高い場合にも、Well-being評価尺度得点が高くなり、LASMIの得点は低くなるという結果になった(図6)。



Well-being評価尺度とLASMI間に負の相関がみられ、BSCPとの間に正の相関がみられた。つまりWell-being評価尺度得点が高い場合(主観的幸福感が高い場合)には、LASMIの得点は低くなる(生活障害の程度が軽くなる)という結果になった(図5)。



つまり、主観的幸福感が高いと、ストレス対処能力が高く、生活障害は低くなるという結果が得られた。

### 聞き取り調査結果

『一番身になったプログラムについて』

SCIT、SST、ハートフル作業体験の回答を得た。これらのプログラムでは、メンバー同士、コース担当スタッフらとの関わりが密接である。つまり、密接な関わりを育むプログラムと考えられる。

### ■考察

主観的幸福感、つまりWell-beingについての研究において大坊(2009)は「ウェルビーイングは努力せずに得られるものではなく、円滑な対人関係の展開に密接に関わるものである」と述べている。就労準備コース内でのSCITやSST、ハートフル川口での作業体験等を通してのメンバー同士、就労準備コース担当スタッフとの密接な関わりによる対人関係の交流や展開が、主観的幸福感に影響を及ぼした可能性が示唆される。

また、主観的幸福感についての研究において寺崎ら(1999)は「幸福感は過去から現在までの経験によってのみ規定されるのではなく、将来に対する展望をもつことが重要である」と述べている。就労準備コースに参加している状況は、身近なメンバーがデイケアを卒業後ハートフル川口を経て就職していくモデルケースを見て、今後についてイメージしやすい環境にある。これは、就職までの実際の道筋が立ちやすいことを意味し、自分も就労できるのではないかという希望や展望をも

---

ちながら取り組むことが主観的幸福感との相互関係で互いに高まっていったと思われる。本研究の結果から、就労準備コースにおける密接な関わりを育むプログラムへの取り組みが、参加メンバーの主観的幸福感を向上させている可能性が示唆された。加えて、主観的幸福感が高ければ、ストレス対処能力について高く、生活障害は低くなるという関連性があることが示唆された。このことは、主観的幸福感が日常生活の中でいかに重要な位置づけのものであるかを示しているといえる。

私たちは、将来的な就職という目標のもとに、就労支援に取り組んでいるが、本研究においては主観的幸福感の向上という驚きの結果に繋がった。これは、就労準備コースで取り組んでいる就労支援が、就職に留まらずにその人の生活全体への影響・効果をもたらしていると考えられる。

今回LASMI、BSCP得点に有意な変化は見られなかった。そのことから、今後の課題として対人関係、持続性、安定性といった個々の能力の向上、そしてストレス対処能力の向上の2点があげられる。今後はこれらの課題を考慮した就労支援プログラムの充実と、メンバー1人ひとりに合わせた個別支援のさらなる充実を合わせてアプローチをしていきたいと考えている。

## ■引用文献

- 1) 寺崎正治、網島啓司、西村智代 主観的幸福感の構造 川崎医療福祉学会誌 Vol. 9 43-48 1999
- 2) 大坊郁夫、稲毛一也、相川充、安藤清志、大竹恵子 well-beingを目指す社会心理学の役割と課題 対人社会心理学研究. 9:1-32 2009

## ■参考文献

- 1) 下平(渡辺)美智代、松本人志 SWNS-J手引き 抗精神病薬下主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版の日本語版 星和書店 2010
- 2) 影山隆之、小林敏生、河島美枝子、金丸由希子 勤労者のためのコーピング特性簡易尺度

(BSCP) の開発：信頼性：妥当性についての基礎的検討 産業衛生学雑誌第46巻 4号 頁103-114 2004

3) LASMI (精神障害者社会生活評価尺度) マニュアル、フェイスシート 障害者労働医療研究会精神障害部会 1995

4) 中込和幸、最上多美子、池澤聡 統合失調症と社会脳 精神医学-51(3) : 257-263 2009

5) 最上多美子、中込和幸 SCIT(社会認知・対人関係のトレーニング) 精神科 18(1):44-48 2011

---